日本自動車工業会 広報誌

ISSN 0911-7113 自動車工業
JAMAGAZINE 2023年秋号
2023年10月26日発行（季刊発行）

jamagazine

Japan Automobile Manufacturers Association

秋
JAMA Vol.57
AUTUMN 2023

JAPAN MOBILITY SHOW 2023

メーカー展示の見どころ

迫力満点！日本開催の世界最高峰レース

自工会、学生向けオンラインイベント

「Drive for the Future ―モビリティ業界 Special Talk ―」を開催

乗りたい未来を、探しにいこう!

Japan Mobility Show

私たちはもういちど、大きな夢を持てるだろうか。まいにち、明日にドキドキできるだろうか。

2023年、東京のモーターショーは、日本のモビリティショーへ。

日本の未来をまるごと体験する機会へ。みんなのこころが動くとき、時代は一気に動き出す。

＜一般公開日＞ *General Public Days*

2023.10.28 Sat – 11.5 Sun

＜会場＞

東京ビッグサイト

TOKYO BIG SIGHT

＜チケット好評発売中＞

jama

※10/26（オフィシャルデー）に一般の方はご入場いただけません。10/27（特別招待日および障がい者手帳をお持ちの方の特別見学日）は、12時30分より一般の方もご入場は可能ですが、プレビューデー・チケットが必要です。詳細は公式HP等でご確認ください。

jamagazine 秋
JAMA
Vol.57
AUTUMN
2023

1 JMSで人と協調し活躍するモビリティを紹介するエマージェンシー&モビリティゾーン
2 学生フォーミュラで優勝した京都工芸繊維大学チーム
3 二輪車普及・安全啓発のためのイベント「8月19日はバイクの日　HAVE A BIKE DAY」
4 科学技術館2階の「ワクエコ・モーターランド」

CONTENTS

04 **JAPAN MOBILITY SHOW 2023 主催者展示の見どころ**

10 いすゞ自動車
11 カワサキモータース
12 スズキ
13 SUBARU
14 ダイハツ工業
15 トヨタ自動車
16 日産自動車
17 日野自動車
18 本田技研工業
19 マツダ
20 三菱自動車工業
21 三菱ふそうトラック・バス
22 ヤマハ発動機
23 UDトラックス

24 **迫力満点！日本開催の世界最高峰レース**

27 4年ぶり海外チームも参加
学生フォーミュラ日本大会2023

30 バイク文化の創造へ！
「第11回BIKE LOVE FORUM in 静岡・浜松」を開催

32 自工会 二輪車委員会と日本二輪車普及安全協会
「バイクの日」のイベントを開催

34 自工会、学生向けオンラインイベント
「Drive for the Future —モビリティ業界 Special Talk —」を開催

37 遊びながらクルマを学べる！
科学技術館の「ワクエコ・モーターランド」

JAMAGAZINEは
自工会WEBサイトからも
ご覧いただけます
www.jama.or.jp/lib/jamagazine/index.html

Japan Mobility Show

ジャパンモビリティショー2023 開催にあたり

会長豊田章男 抱負

（記者会見から抜粋）

△豊田章男会長

2018年５月、私が２度目の自工会会長に就任した当時の自動車業界は、CASE（コネクテッド、自動化、シェアリング、電動化）革命により、「100年に一度」と言われる大変革期に突入したところでした。次の100年もクルマはモビリティ社会の主役でいられるのか。これが私たちに突き付けられた命題であり、その象徴が、来場者数が減少し続けてきた東京モーターショーだったと思います。

私が自工会会長として最初に取り組んだテーマが、19年に開催を控えた東京モーターショー改革でした。私が関係者に伝えたことはただ一つ、「人が集まるモーターショーにチャレンジしよう」。それだけでした。経済界協議会と連携し、日本の最新技術や未来を体感いただく「FUTURE EXPO(フューチャーエキスポ)」、ドローンショーやｅモータースポーツ大会など、皆がやりたい、面白いと思う企画には、すべてゴーサインを出しました。その結果、130万人ものお客さまにご来場いただき、多くの笑顔をいただくことができました。

しかし、その２カ月後、私たちは「コロナ」という未曽有の危機に直面することになります。「移動すること」「集まること」が「悪」になり、私たちの日常は一変しました。しかし、失ったものばかりではありませんでした。私たち自動車産業で言えば、これまで当たり前だと思っていた「移動」が、実は多くの人たちの働きによって支えられていることに気付くことができたと思います。

そして、クルマを走らせる550万人が近づき、つながり、一つになって、動き始めました。私たちの暮らしで言えば、皆が新しいコミュニケーション手段を求めた結果、オンラインミーティングやフードデリバリーなど、つながるための新しい技術・サービスが大きく進化いたしました。

コロナ危機を乗り越えた今、東京モーターショー改革をさらに一歩、前に進めるという決意を込めて、本年から「ジャパンモビリティショー」に進化させて参ります。「クルマからモビリティへ」「東京からジャパンへ」。特にジャパン。日本には素晴らしい技術がたくさんあります。未来をつくるために日々、挑戦を続けておられる経営者もたくさんおられます。そんな人や技術が集まり、つながる場所をつくりたい。「日本発」の未来を世界に発信したい。そんな想いを、ジャパンという言葉に込めました。

今回のショーでは、過去最多となる400社以上の方々にご参加いただくことができました。スタートアップ企業と既存の企業をマッチングし、新しいビジネスの機会を提供することも考えております。また、モビリティが実現する未来や街を体感できる「TOKYO FUTURE TOUR（東京フューチャーツアー）」や、水素エネルギーを使ったエンタメイベントなど、楽しい企画を予定して

▲(左上から)副会長 永塚誠一(自工会)、内田誠(日産)、三部敏宏(ホンダ)、鈴木俊宏(スズキ)、佐藤恒治(トヨタ)、片山正則(いすゞ)、会長 豊田章男(トヨタ)、副会長 日高祥博(ヤマハ)

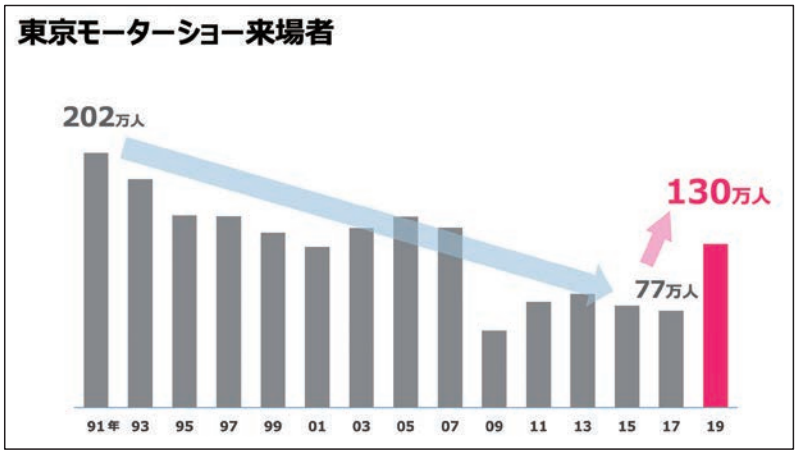
います。

「乗りたい未来を探しに行こう」。これが今回のテーマです。ぜひ、乗りたい未来を探しに会場へお越しください。自工会としても、この場にいるトップが中心となって、全力でショーを盛り上げ、今回も100万人を超える方々にご来場いただきたいと思っております。私自身、時間が許す限り、会場に足を運び、「笑顔」と「ありがとう」の連鎖をつくりたいと考えております。

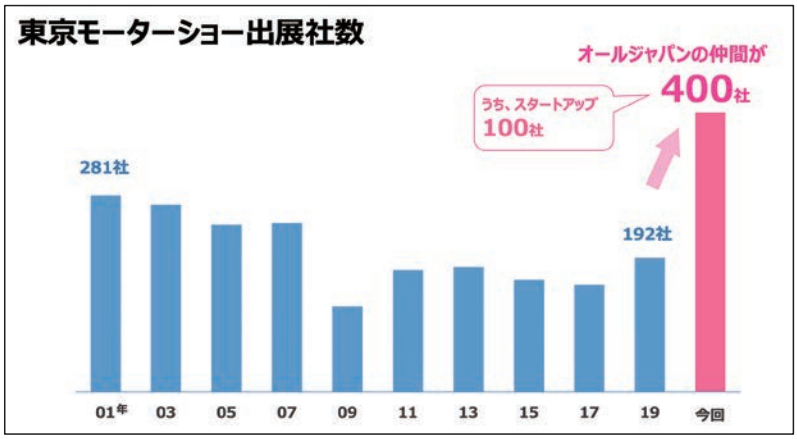
「自動車はみんなで一緒にやる産業」「未来はみんなでつくるもの」だと思います。日本の未来をより良いものにするため、ぜひ応援いただきますよう、よろしくお願いいたします。

(2023年9月21日記者会見より抜粋)

【中継】日本自動車工業会記者会見(9/21)



▲来場者数の推移



▲出展社数の推移

JAPAN MOBILITY SHOW 2023

主催者展示の見どころ

自工会は10月28日（土）～11月5日（日）まで、東京ビッグサイト（東京都江東区）で「JAPAN MOBILITY SHOW 2023（ジャパンモビリティショー）」を開催します。これまでの東京モーターショーは自動車メーカー、部品メーカーなど自動車産業を中心としたショーでしたが、ジャパンモビリティショーは自動車産業の枠を超えさまざまな産業と共に、日本の未来を創っていくショーに生まれ変わります。

様々なプログラムを見て、聞いて、楽しんで、「乗りたい未来を探しにいこう！」、是非、会場にお越しください。

多彩な主催者プログラムの中から見どころをご紹介します。

新生ジャパンモビリティショーは、前回2019年の東京モーターショーに比べ、参加企業が大幅に拡大します。情報･IT、金融、保険、観光、エネルギー、教育、行政など、さまざまな産業とともに、皆さまに日本の未来を体感していただきたい、今後もモビリティ産業をさまざまな仲間とともに拡張し、新たな価値の創造やさまざまな社会課題を解決したい。その想いに共感していただいた企業の参加が、前回（192社）の約2.5倍、500社近くに上がりました。多様な仲間たちが力を合わせ、一丸となってモビリティ産業そのものを拡大していこうとする姿をご覧ください。

▲西棟1階で開催する東京フューチャーツアー

未来のモビリティを体験 Tokyo Future Tour

主催者展示の大きな見どころが、西展示棟1階で開催する「Tokyo Future Tour（東京フューチャーツアー）」です。これまでの東京モーターショーでは、近い将来に発売されるコンセプトカーなどの出展が中心でした。Tokyo Future Tourでは、未来のモビリティと新しいライフスタイルを体感していただきます。

このプログラムには、経団連モビリティ委員会の企業を中心に約180社が参加します。音楽と映像、最先端技術を駆使した空間で、モビリティが変える未来の東京を体感できるミュージカルツアーとなっており、単に展示を観るだけでなく、臨場感あふれるドラマチックな体験を楽しむことができます。

東京フューチャーツアーは、大きく5つのコンテンツで構成しています。1つ目のコンテンツは、未来の東京を没入体験できる「Immersive Theater（イマーシブシアター）」です。大型のモニターに囲われた空間で、未来の東京の街を大迫力の音と映像で体験することができます。ここから始まる各コンテンツの入り口として、期待感を高めます。

イマーシブシアターを抜けた先に広がるのは「LIFE/EMERGENCY/PLAY/FOOD」の4つを切り口に、モビリティが変える未来をミュージカル仕立てで体感していただく2つ目のコンテンツです。モビリティが変える未来の移動シーンと街並み、その中でモビリティがどのように使われているのかを紹介する「LIFE&MOBILITY」ゾーン、災害大国･日本の未来で人と協調して活躍するモビ

▲イマーシブシアター

リティを紹介する「EMERGENCY&MOBILITY」ゾーンが続きます。

「EMERGENCY & MOBILITY」エリアでは、2023年11月3日に全国ロードショーを予定している映画「ゴジラ-1.0（マイナスワン）」とスペシャルコラボレーションが実現。楽しい時のモビリティだけではなく、有事の時にもモビリティが活躍する未来にも目を向けました。災害大国日本では、今後もさまざまな事象と向き合う必要があります。その時に、我々も一致団結して日本の未来に安心と安全をもたらしたい。そうした想いでコラボレーションに至りました。

さらに、「PLAY&MOBILITY」では、モビリティによって拡張されるスポーツや遊びの楽しさを、モビリティを活用しながら体験していただきます。お子さまも参加でき、幅広い層の方々にお楽しみいただけます。また「FOOD&MOBILITY」ゾーンでは、農作物の生産から配送、そして調理から配膳まで、食のあらゆるシーンで活躍するモビリティを体感することで、拡張するモビリティの役割に期待感を膨らませていただける内容になっています。

スタートアップ育成の場 Startup Future Factory

3つ目のコンテンツが、モビリティ産業の未来を担うスタートアップ企業を育成する場「Startup Future Factory（スタートアップフューチャーファクトリー）」です。スタートアップと大企業が出会い、モビリティ産業を拡張・加速させることを目的としており、そのために必要な資金調達、商談機会、PRなどを5つの取り組みで支援します。

このうち「Pitch Contest & Award（ピッチコンテスト&アワード）」は、スタートアップ支援イベントとして国内最大級の賞金総額1200万円を用意しています。買い物や住まいなどの「LIFE×Mobility 未来の暮らし」、エンタメ・スポーツ・観光などの「EXCITEMENT×Mobility 未来の感動」、防災・交通・配送などの「INFRASTRUCTURE×Mobility 未来の社会基盤」―の3つのカテゴリーでスタートアップ企業を募集。その結果、参加企業は延べ116社（10月4日時点）に上りました。11月4日（土）の決勝には、遠隔操作技術を駆使した作業効率化ロボットや、ワイヤレス電力伝送技術でモビリティを電動化するなど、多彩な業界、色々なフェーズのスタートアップ15社に登場いただき、フリーアナウンサー平井理央さんのMCと、スタートアップに精通した有識者7名を含む9名と共に、厳正なる審査の下、アワードを決定します。モビリティの未来を担う新進気鋭のスタートアップの登場に注目してください。

スタートアップと大手企業の出会いの場となるマッチングイベント「Business Meetup（ビジネスミー

▼ライフ&モビリティ

▲エマージェンシー＆モビリティ

トアップ）」も開催します。10月27日（金）、30日（月）、31日（火）、11月1日（水）、2日（木）の5日間、「災害」「少子高齢化」「地域創生」「環境」「ウェルビーイング」といったテーマに沿って、モビリティ関連企業と最新技術とアイデアを持ったスタートアップ企業を引き合わせます。新規ビジネスの創出を含め、各企業の成長とモビリティ産業の拡張を加速させます。

このほか、スタートアップの未来のテクノロジーに出会える場「Startup Street（スタートアップストリート）」、来場者が想像するモビリティの未来をヒアリングアーティストが絵に描いて可視化する「未来掲示板」、スタートアップの技術を分かりやすく伝える「未来の技術解説映像」といったコンテンツも用意しています。

スタートアップストリートには、延べ100社に上るモビリティの未来を担うスタートアップがブース出展し、さまざまな製品・技術・サービスでお出迎えします。空を飛ぶドローンのみならず、水上を進むドローンや、ロケットではなく気球で宇宙観光を目指すスタートアップなど未来のモビリティ産業にココロ弾む場となります。

これらのプログラムを通し、これからの未来を担う起業家の斬新なアイデアや想いに触れることで、皆で「ワクワクする未来」を考える機会を提供します。

日替わりテーマでトークショー Japan Future Session

4つ目のコンテンツは、日本の未来をつくるトークショー「Japan Future Session（ジャパンフューチャーセッション）」です。「モビリティ」と「未来」という共通テーマを軸に、サステナビリティやAI(人工知能)といった話題から、アウトドア、モータースポーツ、おもちゃといったやわらかいテーマまで、期間中、日替わりで実施します。

例えば、人とモビリティロボットが生み出す新しい幸せの形、子どもたちが見てわくわくするような未来の働くクルマ、本能に訴えかけるような楽しさを生むモビリティとアウトドアの未来など、子どもから大人まで楽しんでいただける幅広いテーマを用意し、モビリティの未来にワクワクしていただきます。

5つ目のコンテンツとして、次世代モビリティを試乗体験する「Personal Mobility Ride(パーソナルモビリティライド)」もご用意しています。実用フェーズにある少し先の

▼プレイ＆モビリティ

▲フード&モビリティ

次世代モビリティを試乗体験いただき、モビリティに乗る楽しさを感じていただきます。

クルマ・バイクファン向けプログラムも多彩

このほかにもクルマ・バイクファンに向けた多彩なプログラムを実施します。初めて設置するモータースポーツエリアでは、屋内展示エリアでレースカーの展示、eモータースポーツの全日本大会の決勝、トークショー、さらにレースに携わるメカニックやエンジニアなどが参加するイベントも行います。屋外ではプロドライバーによるレースカーのデモランや、タイヤ交換デモを行うなど、モータースポーツの魅力を存分に味わっていただきます。

さらに、日本RV協会との連携により、キャンピングカーのエリアも初めて設置します。アウトドアシーンにおけるモビリティの楽しさを体感していただけます。屋外の無料エリアでは、軽トラ市や働くクルマの展示、スーパーカーの展示など、日替わりでさまざまなプログラムを実施します。プログラム満載のジャパンモビリティショーに、ぜひ足をお運びください。

10月4日ジャパンモビリティショー開催直前説明会

▲ジャパンフューチャーセッション

▲eスポーツの全日本大会決勝も行う

▲レースカーの展示イベントを開催

開催概要

名称	JAPAN MOBILITY SHOW 2023
主催	一般社団法人　日本自動車工業会
会期	2023年10月26日（木）～11月5日（日）※一般公開は10月28日（土）から
メイン会場	東京ビッグサイト
公式サイト	https://www.japan-mobility-show.com/

ISUZU

いすゞ自動車は初めてUDトラックスと共同出展します。ブースステーマは「INNOVATION FOR YOU ～ 加速させよう、「運ぶ」の未来。～」。未来のモビリティ社会をイメージしたブースでいすゞグループが描く、ワクワクする「運ぶ」の未来を皆さまにご提案します。

ERGA EV

カーボンニュートラル（CN）社会の実現のために開発したバッテリー（BEV）フルフラット路線バスです。ディーゼルエンジン搭載の従来のノンステップバスと同等の乗降性に加え、車室内後部の段差をなくすことで、車内移動のバリアフリー化を図りました。2024年度中の発売を目指します。

EVision Cycle Concept

CNの新たな選択肢として提案するバッテリー交換式ソリューションです。環境省が公募するバッテリー交換式EVトラックの委託事業への参画などを通じて得たノウハウを活用しています。充電済みバッテリーと素早く交換できるため、効率的な稼働を実現します。

GIGA FUEL CELL

いすゞと本田技研工業が2020年1月に共同研究契約を締結して以来、両社の技術や知見を注ぎ、開発してきた燃料電池（FC）大型トラックで、初めて一般公開します。いすゞが大型トラック「ギガ」を、ホンダがパワートレインのFCをそれぞれ提供しました。2027年には市場への投入を目指しています。

ELF EV

小型トラック「エルフ」シリーズのフルモデルチェンジに合わせ、いすゞ初のバッテリーEVとしてラインアップに加わりました。

ELFmio

新型「エルフ」シリーズに加わる予定の「ELFmio」は、普通自動車免許で運転できる小型トラックです。

Kawasaki
Let the Good Times Roll

カワサキのモーターサイクル事業は今年、70周年を迎えました。カワサキブースのコンセプトは「伝統と革新」。この「伝統と革新」とともに、商品をご紹介します。初公開モデルのほか、ヘリテージモデルやオフロード四輪車、国内で販売中の人気モデルを展示します。

▲MEGURO S1

▲W230

MEGURO S1（メグロエスワン）/ W230（ダブリューニヒャクサンジュウ）

来年100周年を迎える「MEGURO」ブランドの新たなモデル「MEGURO S1」と、カワサキとメグロが生んだ“W”ブランドから「W230」をそれぞれ世界初公開します。

▲Ninja ZX-4RR（40 th Anniversary モデル）

Ninja ZX-10R / Ninja ZX-4RR（40 th Anniversary モデル）

来年40周年を迎える「Ninja」に、1980年代から90年代に活躍した「ZXR」シリーズのカラーリングとグラフィックスを40 th Anniversary モデルとして「Ninja ZX-10R」と「Ninja ZX-4RR」で再現しました。(日本導入予定)

KLX230

オフロードを多彩に軽快に遊べる「KLX230」を世界初公開します。

▲Ninja e-1

▲Ninja 7 Hybrid

Ninja e-1 / Ninja 7 Hybrid

カワサキ初の電動モーターサイクル「Ninja e-1」と、世界初※1のストロングハイブリッドモデル※2「Ninja 7 Hybrid」。(日本導入予定)

※1　主要メーカーの量産モーターサイクルとして世界初(スクーターを除く)、2023年10月6日現在。カワサキモータース調べ
※2　ストロングハイブリッドシステムは、エンジンと電気モーターを組み合わせることによりパワフルな走行を実現し、また電気モーターのみでも走行可能なシステムです

スズキは、「世界中に、ワクワクのアンサーを。」をテーマに出展します。「将来のカーボンニュートラルに向けたスズキの多様な取り組みを、スズキらしいモビリティやサービスでお客様にお届けする。」というメッセージとともに、楽しさ（ワクワク）を体感いただけるブース展示と演出を行います。

eVX

1月にインドで開催された「Auto Expo2023」で公開したスズキのEV（電気自動車）世界戦略車第1弾。エクステリアを進化させるとともに、インテリアを初公開します。スズキのSUVにふさわしい本格的な走行性能を実現するEVモデルとして提案します。

eWX

楽しく実用的な軽ワゴンと、EVらしい先進感をクロスオーバーさせたコンセプトモデルです。親しみやすいキャラクターを施したエクステリアと、使いやすく居心地の良い室内空間により、毎日の生活を支える「相棒」のような存在を表現しています。

▲スペーシア コンセプト

▲スペーシア カスタム コンセプト

スペーシア コンセプト / スペーシア カスタム コンセプト

個性的なスタイルと広い室内空間を持つスペーシアに「日常をもっと楽しく便利に快適に!」の想いを詰め込んだコンセプトモデルです。

スイフト コンセプト

「Drive&Feel」という言葉を大切に開発し続けてきた「スイフト」の新たな価値を提案するコンセプトモデル。デザインと走りだけでなく、「クルマと日常を愉しめる」という新しい価値を提供します。

MOQBA

公共交通機関が発達した地域においても、移動の際に段差などが障壁となる方に向けた、車輪と4つの脚を活用した次世代モビリティの提案です。

SUBARU

SUBARUはジャパンモビリティショー2023で、SUBARUが目指す未来のモビリティや、社会とのつながりを強める取り組みの発信によって、今と、そしてこれからの時代における「安心と愉しさ」を表現します。

SUBARU AIR MOBILITY Concept

電動化や自動化技術が進化し、航空機の世界でも「空の移動革命」を実現する新たなエアモビリティへの期待が高まっている中、SUBARUが目指す、「より自由な移動」の未来を示したコンセプトモデルです。

SUBARU SPORT MOBILITY Concept

電動化時代も、日常から非日常まで意のままに運転し、いつでもどこへでも自由に走って行ける愉しさを表現。安心だからこそ、ワクワクするような新しい挑戦ができる。SUBARU SPORT価値の進化を予感させるBEV（電気自動車）のコンセプトモデルです。

レヴォーグ　レイバック　「Limited EX」

「レヴォーグ」が持つ先進安全・スポーティ・ワゴン価値の3つの価値に加え、SUVの価値である自在性と、上質さを兼ね備えた、SUBARUの豊富なSUVラインアップの中で唯一無二の存在となるSUVとして、日本市場向けに新たに開発したモデルです。

ソルテラ「ET-HS」

SUBARU初のグローバルBEV「ソルテラ」を改良しました。「SUBARU Safety Sense」の機能を拡充し、安全性能を向上するとともに、オーバルステアリングホイールの採用で先進感とスポーティ感を演出するとともに、メーター視認性を改善しました。

DAIHATSU

ダイハツ工業は、創業以来持ち続けてきた「お客様に寄り添い、暮らしを豊かにする」という現在のビジョンに込められた思いを出展テーマに据えました。お客さまに寄り添い、進化し続けてきたダイハツの歴史を象徴する車両と、その先の未来を描いた５台のコンセプトカーを展示します。

me：MO（ミーモ）

ライフステージに合わせ、スタイルや楽しみ方を変えることができるサステナブルな軽乗用BEV（電気自動車）です。テーマは「クルマと人の関係の再定義」。作り方も楽しみ方もゼロから考えた新しいカタチです。

OSANPO

オープンエアの心地よさを散歩に出かけるような手軽さで楽しめ、日常にスローな価値を生み出す軽乗用BEV。気持ちのいい風に吹かれながら、お散歩気分で身近な自然をスローに楽しむ贅沢な一台です。

▲UNIFORM Truck（ユニフォーム トラック）

▲UNIFORM Cargo（ユニフォーム カーゴ）

UNIFORM Truck（ユニフォーム トラック）/ UNIFORM Cargo（ユニフォーム カーゴ）

使いやすさなど働くクルマの原点を追求し、多様な働き方や用途に対応する未来の軽商用BEVです。多様な働き方に応える無駄のないデザインは、働く人の誇りを高め、実用的な可能性を広げます。

VISION COPEN

コペンのDNAである風とともに走る喜びを進化させるオープンカー。FRレイアウトとカーボンニュートラル燃料の活用を見据えた内燃機関の組み合わせにより、走る楽しさを極めた新たな小型オープンスポーツの提案です。

TOYOTA

トヨタ自動車は、「クルマの未来を変えていこう—Find Your Future」をテーマに出展します。次世代バッテリーEV（BEV）のコンセプトモデルを公開するほか、モビリティをカスタマイズできる体験や、どなたでも手元で運転操作が可能なレースゲームなどで、未来のモビリティ社会の生活を体験いただきます。

FT-3e(エフティースリーイー)

SUVタイプのBEVコンセプトモデル。新たなドライビング体験と一人ひとりに寄り添うサービスで、日々の生活を彩ります。車内外のデータやエネルギーの移動媒体として社会とつながり、カーボンニュートラルの実現や、より良い社会づくりにも貢献します。

FT-Se（エフティー エスイー）

スポーツタイプのBEVコンセプトモデル。TOYOTA GAZOO Racingが取り組む「モータースポーツを起点としたもっといいクルマづくり」の思想のもと、カーボンニュートラル時代におけるスポーツカーの選択肢の一つとして提案します。

KAYOIBAKO（カヨイバコ）

“好きなときに･好きな場所で･好きなことができる”モビリティの未来を実現するコンセプトモデル。ブースでは、ビジネスからプライベートまで自由に行き来するお客さまのニーズにどのようにお応えできるかをショー形式で表現します。

LEXUS バッテリーEVコンセプトカー

LEXUSは次世代バッテリーEVのコンセプトモデルを世界初出展します。ブースでは、日本の伝統的で美しい工芸技術を融合させ、サステナブルな「クルマの未来」を表現。またVRシミュレーターで社会とつながる未来のドライビングを疑似体験いただけます。

NISSAN

日産自動車は、未来を切り拓き、ワクワク感を次のレベルへ引き上げるEV（電気自動車）コンセプトカーや先進技術を、フィジカルとデジタルがシームレスに融合したインタラクティブなブースで展示します。移動と社会の可能性を広げる電動化技術やさまざまな取り組みもご体感いただけます。

ニッサン　ハイパーアーバン（デジタルモデル）

環境や社会課題への意識が高く、今あるものを大切に使い続けながら、アクティブに活動する方に向けたクロスオーバーEV。ソフトウエアを常に最新状態にアップデートすることで、長く、愛着を持って乗り続けることを可能にします。

ニッサン　ハイパーアドベンチャー（デジタルモデル）

自然を愛し、環境に配慮したライフスタイルを送りながら、アウトドアを思う存分楽しみたい方に向けた本格SUV。山へ遊びに行くときも、人里離れた場所へ数カ月にわたって旅するときも、アウトドアでの多様なニーズに応えます。

ニッサン　ハイパーツアラー

日本ならではのおもてなしの精神や上質さ、自動運転をはじめとする先進技術を融合したプレミアムEVミニバンです。プライベートの旅行やビジネス出張など、目的を問わず、ともに過ごす方との時間をより一層楽しみ、絆を深めることができます。

ニッサン　ハイパーパンク

コンテンツクリエイターやインフルエンサー、アーティストをはじめとするスタイルとイノベーションを重視するお客さまが、自己表現と創造性を高めることができるコンパクトクロスオーバーEVです。

日野自動車は、「人、そして物の移動を支え、豊かで住みよい世界と未来に貢献する」をテーマに出展します。物流における2024年問題など社会課題の解決に貢献する製品・技術・ソリューションを、実車や動画、パネルで紹介します。

▲小型BEVトラック「日野デュトロ Z EV　ウォークスルーバン」

▲小型BEVトラック「日野デュトロ Z EV　アルミバン(サイド扉付)」

小型BEVトラック「日野デュトロ Z EV　ウォークスルーバン」
小型BEVトラック「日野デュトロ Z EV　アルミバン(サイド扉付)」

BEV（電気自動車）専用シャシにより実現した超低床構造で、荷役作業性や乗降性に優れ、ドライバーの負担軽減に貢献、ラストワンマイル配送の現場での使い勝手とゼロエミッションを高次元で両立しました。ウォークスルーバンとアルミバンを展示します。

燃料電池大型トラック
「日野プロフィア Z FCVプロトタイプ」

カーボンニュートラルと水素社会の普及に貢献する日野プロフィア Z FCVプロトタイプは、トヨタ自動車と日野が共同開発し、実用化への取り組みを推進しています。商用車としての実用性と環境性能を高次元で両立することを目指しています。

社会やお客様の困りごとを
解決するためのソリューション

▲ブースイメージ

商用EVの最高に使い勝手の良い利用環境の構築を目指し、商用EVや付帯設備の導入コンサルティングなどのソリューションを紹介します（同時出展:CUBE-LINX）。

より少ないドライバーとトラックで多くの荷を運ぶためのオープンな枠組みを、さまざまなステークホルダーと共創し、社会課題の解決を目指す取り組みを紹介します（同時出展:NEXT Logistics Japan）。

HONDA The Power of Dreams | How we move you. CREATE ▶ TRANSCEND, AUGMENT

ホンダは、ホンダの夢をかたちにしたモビリティを起点に、未来に向けてお客さまの夢が多様性に満ちて広がっていくことを表現する「Honda DREAM LOOP」をテーマに出展します。「時間や空間といったさまざまな制約からの解放」「人の能力と可能性の拡張」といった価値を体現したモビリティや技術を紹介します。

▲SUSTAINA-C Concept

▲Pocket Concept

SUSTAINA-C Concept / Pocket Concept

限りある資源の制約から解放してくれる四輪・二輪モビリティのコンセプトモデル。使用済みアクリル樹脂を再利用して作られています。資源の循環利用によって、地球資源の保護と自由な移動の喜びを将来にわたり両立することを目指しました。

SC e: Concept（エスシー イー コンセプト）

バッテリーを簡単に交換することで、充電待機時間という制約からも解放してくれる二輪電動モビリティのコンセプトモデルです。再生可能エネルギーの活用を拡大する手段の一つである交換式バッテリー「Honda Mobile Power Pack e:」2個を動力源に採用しました。

Honda CI-MEV（シーアイ・エムイーブイ）

ホンダ独自の協調人工知能や自動走行技術により、ラストワンマイルを誰でも手軽に自由に移動できる二人乗りの四輪モビリティの実証車です。公共交通機関がない場所での移動など、移動範囲が狭くなりがちな人の生活圏の拡張を目指しています。

Honda Specialty Sports Concept

カーボンニュートラル実現のための電動化や、自動運転技術が普及していく中でも、運転する楽しみを体感できる四輪電動スポーツのコンセプトモデルです。

マツダは「『クルマが好き』がつくる未来。」をテーマに出品します。人々の中にある「クルマが好き」という気持ちに寄り添い続けるマツダが考える未来の提案として、「前向きに今日を生きる人の輪を広げる」というマツダの企業理念を具現化した５つのテーマ展示を行います。

MAZDA ICONIC SP

クルマや移動体験を通じて、日々が楽しく、いきいきと元気になる。世の中がどう変わろうとも、クルマを通してお客さまに笑顔をお届けすることは、私たちマツダの使命。移動体験の感動を量産するクルマ好きな会社として、皆さまが胸を張ってクルマ好きと言える未来を作っていきたい。これからのカーボンニュートラル社会も心おきなく笑顔で楽しんでいただける、新しい時代への決意を込めたスポーツカーコンセプトです。

▲マツダ　ロードスター（ソフトトップ）

▲マツダ　ロードスター RF（リトラクタブルハードトップモデル）

マツダ　ロードスター

小型オープンスポーツカー「マツダ ロードスター（ソフトトップモデル）」、「マツダ ロードスター RF（リトラクタブルハードトップモデル）」を大幅改良します。現代に求められる新たな安全法規に適合しながら、ロードスターらしさを追求した進化により、「人馬一体」の走りの楽しさをさらに高めています。最新の先進安全技術やコネクティッド技術を搭載し、より多くの方に安心してロードスターを選んでいただけるようになりました。

MITSUBISHI MOTORS
Drive your Ambition

三菱自動車工業は、「冒険心はいつもあなたの中にある。いつだって誰だって、どこにいたって冒険はできる。」をブーステーマに出展し、三菱自動車ならではの冒険心を呼び覚ますモビリティライフを提案します。また、さまざまな企業とコラボレーションした車両も展示します。

コンセプトカー

SUVならではの走破性とMPVの居住性と快適性、使い勝手を兼ね備え、カーボンニュートラル社会の実現を見据えた電動クロスオーバーMPVです。“Borderless Adventure”をコンセプトとし、開放感あふれる圧倒的大空間キャビンと、さまざまな冒険に応える航続距離と走破性を実現します。

電動小型モビリティ「Last 1 mile Mobility」

次世代椅子型モビリティの開発・製品化に取り組むスタートアップ企業LIFEHUBとのコラボレーションによる、未来の小型モビリティです。電動車の使用済みバッテリーを搭載したバギータイプで、クルマで辿りついた場所の、さらに一歩先への冒険を可能とします。

新型トライトン（プロトタイプ）

新型「トライトン」は「Power for Adventure」という商品コンセプトのもと、内外装デザインからフレーム、シャシー、ボディ、エンジンなどを一新した1トンピックアップトラックです。日本市場に約12年ぶりに投入する計画で、2024年初頭の発売を予定しています。

三菱ふそうトラック・バスは、グリーンで持続可能な未来に向けた同社のビジョンを示す製品やサービスを紹介します。ブースでは、すべてが積み木のように集まり、未来をつくり上げる様子を表現しました。ブランドスローガン「Future Together」に込めた「共に未来を創る」という理想を表しています。

新型eCanter ダンプ車両

電気トラック「eCanter」のダンプ車両です。動力取り出し装置を搭載することで、架装バリエーションを拡大しました。走行時に排ガスを一切出さず、振動や騒音が少ないため、環境や地域の暮らしに配慮した作業を可能にします。

新型eCanter ゴミ収集車

EVの持つ都会的なイメージを活かし、建築物との調和と汚れの溜まりにくい構造を目的とする直線を基調にしたフラットなデザインとしました。騒音や振動が少ないため早朝や深夜での走行や作業にも適し、環境に配慮した地域サービスに貢献できます。

新型スーパーグレート

経済性･安全性･快適性を向上し、キャブデザインも一新した新型スーパーグレートを世界初公開します。12.8リットルエンジンを追加し、キャブの空力抵抗の改善や転がり抵抗の少ないタイヤを採用することで経済性･環境性能を向上しました。

Ample社とのバッテリー交換技術

三菱ふそうとAmple社によるバッテリー交換技術を紹介します。日本初の公開試験として、バッテリー交換ステーションで新型eCanterのバッテリーを5分で交換するデモンストレーションを行います。

YAMAHA

ヤマハ発動機は、“「生きる」を、感じる”をテーマとするブースを出展します。ワールドプレミア６モデルを含むモーターサイクルや電動コミューターなどを出展。YAMAHAブランドを共有するヤマハ株式会社の協力により、ふたつのヤマハの先進技術を活かしたステージ演出などを実施します。

MOTOROiD2

モビリティに知能化技術を融合させ、その概念を実証する実験モデル。「MOTOROiD」（2017年発表）の進化モデルと位置付けるMOTOROiD2は、オーナーを意識して起き上がり、伴走し、その背に乗せて走行する生き物のような生命感と「人生の伴侶」のような存在感を持つパーソナルモビリティです。

TRICERA

操縦する悦びを探求する3輪パッケージのフルオープンEV（電気自動車）のコンセプトモデルです。開発コンセプトは「Urban Exciting Mobility ～心身とマシンがひとつの有機体となる～。」オープンエアの解放感の中で、3輪&3WSによる新しい感動体験を創出するパーソナルモビリティです。

ELOVE

“Game changing!”をコンセプトに、原付スクーターで通学する離島の高校生や、プロ車いすプレーヤーとの共創によるEVスクーターです。二輪車安定化支援システム「AMSAS」を用い、特に歩行時のような極低速域で転倒への不安や操作の疲労を軽減します。

E-FV

「電動モビリティの楽しさの探求」を目的に、若手エンジニア有志が楽しみながら開発したファミリーで楽しめる電動ミニバイク。電動トライアルバイク「TY-E」のパワーユニットを搭載し、シフトチェンジを要さず、走りに集中できるファンビークルを目指しました。

UD TRUCKS

UDトラックスは、初めていすゞ自動車と共同出展します。〈INNOVATION FOR YOU　～加速させよう、「運ぶ」の未来～〉をテーマに、日本初公開の大型トラックQuesterや自動運転車両、さまざまなブースアクティビティをご用意しています。「運ぶ」の未来を加速させ、社会・経済のさらなる発展につなげていきます。

Quon GW6×4

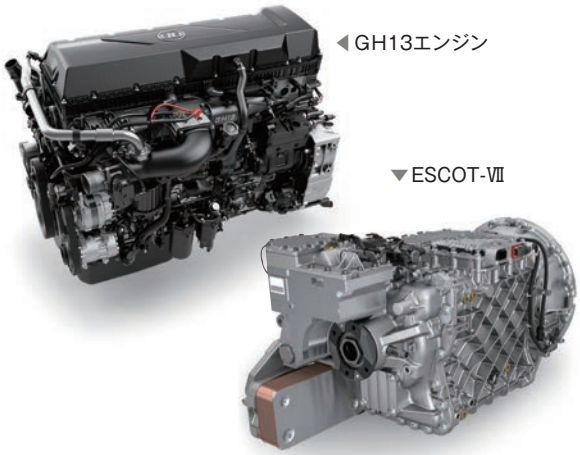
重量物輸送の常識を塗り替えるフラッグシップモデルです。パワフルでありながら省燃費。快適な居住性も備えた、人にも積み荷にもやさしい大型けん引車は、ドライバーの誇りとともに社会インフラを支えます。

Quester GWE6×4

欧州連合（EU）が定める排出ガス規制「ユーロ5」に準拠した新興国専用の大型けん引車。新興国における工業化と経済成長に伴って、各国で大気汚染が深刻化する中、環境負荷低減を念頭に、尿素選択還元型触媒システム（SCR）技術を搭載しました。

自動運転技術（展示車両：Fujin）

いすゞグループは、人々が安全で安心して暮らせる、希望にあふれた未来の創造を目指して、自動運転の開発を進めています。ブースでは、自動運転の取り組みの一例として、UDトラックスが実証実験で使用した「Fujin（風神）」を展示します。



GH13 / ESCOT-Ⅶ

Quon GW6×4トラクターに搭載の「GH13エンジン」と12段電子制御式オートマチックトランスミッション「ESCOT-Ⅶ」を展示します。省燃費運転をサポートし、2025年度の燃費基準も達成しています。

迫力満点！日本開催の世界最高峰レース

▲MotoGPにはホンダとヤマハ発動機が参戦（ホンダのマシン）

▲ヤマハのマシン

▲四輪レースの最高峰・F1

読書やスポーツ、食欲の秋。モータースポーツでも、世界的な人気を集める国際格式のレースが日本で相次ぎ開かれています。テレビやインターネットでの視聴も楽しいものですが、五感で観るモータースポーツはやはり迫力が違います。友人や家族とともに観戦に訪れてみてはいかがでしょうか？

まず紹介するのは、国際自動車連盟（FIA）が主催するフォーミュラ・ワン（F1）世界選手権日本グランプリです。F1はオリンピックと並ぶ国際的なスポーツイベントで、メディアを通じた視聴者数は20億人とも言われます。21年にF1活動を終えた本田技研工業が26年からの復帰を発表したことで、改めて注目されました。

F1は1950年のイギリスで初めて開催された伝統あるレースです。日本の自動車メーカーとしてはホンダが64年に初参戦し、翌65年には初優勝の快挙を成し遂げました。83～92年の「ホンダF1活動第2期」と呼ばれる期間には、日本でもF1ブームが起きました。

使用する車両は、ドライバーとタイヤがむき出しになったレース専用車で、最高速度は時速300kmを優に超えます。直線コースを猛スピードで走り抜ける迫力もさることながら、カーブでの競り合いはF1の大きな見どころです。うまく相手をかわして順位が入れ替わったときなどは、観客席から大きな歓声が上がります。F1は世界最高クラスのドライバーが参戦を目指すレースとして、モータースポーツの頂点に君臨しています。

今シーズンは3～11月までの9カ月間に全23戦が行われる予定です。9月24日に鈴鹿サーキットで決勝が行われた第17戦日本グランプリでは、父親もF1ドライバーで21、22年に年間総合優勝を果たしたマックス・フェルスタッペン選手（オラクル・レッドブル・レーシング）が13勝目を挙げました。今後は日本人ドライバー、角田裕毅選手（スクーデリア・アルファタウリ）の活躍も期待されます。なお、日本グランプリの日程は、来シーズンは春開催となることが決まっており、4月7日に決勝が行われる予定です。

▲昨年のラリージャパン

続いては、二輪車レースの最高峰、MotoGP（ロードレース世界選手権）日本グランプリです。国際モーターサイクリズム連盟（FIM）の主催によるもので、始まりは1949年とこちらも長い歴史があります。現在は「MotoGP」（排気量1000cc）、「Moto2」（600cc）、「Moto3」（250cc）の3つのクラスがあり、MotoGPクラスが最高クラスに位置付けられています。22年の日本グランプリには、悪天候にも関わらず3日間で5万7482人の観客が訪れ、会場が熱気に包まれました。23年も10月1日、ツインリングもてぎで決勝が行われました。

二輪車のレースは四輪車以上に、抜きつ抜かれつの接戦が多く、暴れるマシンを手足のように操るライダーのテクニックが見ものです。今シーズンのMotoGPは全20戦が行われる予定ですが、今年から土曜日にメインレースの半分の距離で行われるスプリント（短距離）レースも加わりました。日本メーカーは「RC213V」の4台体制で臨み、中上貴晶選手（LCRホンダ・イデミツ）も出場するホンダと、2台の「YZR-M1」を送り込むヤマハ発動機の活躍に期待がかかります。

最後に紹介するのが世界ラリー選手権（WRC）の最終戦でもあるラリージャパン2023（11月16～19日、愛知及び岐阜県）です。WRCはF1と同じくFIAが主催するラリーで、欧州を中心に人気が高く、メディアを通じた視聴者数は世界で5億人を超えます。日本では昨年、12年ぶりに復活しました。

ラリーは、一般道を封鎖して設定される「SS（スペシャルステージ）」と呼ばれる競技区間の走行タイムの合計を競います。雪道や未舗装路、ガードレールのない断崖絶壁すれすれの道を信じられないようなスピードで走り抜けていく姿は圧巻の一言です。助手席に座るコドライバー（ナビゲーターとも呼ばれるドライバー以外の選手）が入念にコースを下見し、カーブのR（曲線半径）や勾配、滑りやすさなどをキメ細かくドライバーに教えているからこそできる芸当です。

日本の自動車メーカーからはトヨタ自動車の「ガズーレーシング」が「GRヤリス　ラリー1ハイブリッド」で参戦しています。父親もラリードライバーだった勝田貴元選手は地元愛知県出身で、昨年は3位に入りました。ラリージャパン初優勝への期待が高まります。

▼四季を感じられるコースを設定

今年のラリージャパンは地方自治体が初めて大会運営に加わることでも注目されています。公道を走る地域密着型の競技として、自動車文化の醸成につながるとの期待も高まっています。

1973年に始まったWRCは、F1や世界耐久選手権（WEC）などと並び、国際自動車連盟（FIA）が主催する世界的に著名な自動車レースの一つです。もともとは世界各地で開催されていたラリーの中から14のラリーを選び、それをシリーズ化したのが始まりです。欧州、中南米、アフリカなど各地域で開催し、アジアでは日本で行われています。公道を競技の舞台とし、産業振興、地域振興、モータースポーツファンの拡大などを目的にしています。

専用のサーキットなどを走行するF1やWECと大きく異なるのは、競技が一般道で行われること。舗装路（ターマック）や未舗装路（グラベル）、凍った轍（わだち）のある雪道などの一般道を封鎖して設定する競技区間（SS）の走行タイムの合計で競います。最高速度は時速200kmにも達します。

また「リエゾン」と呼ばれる移動区間があることもWRCの特徴のひとつです。リエゾンとは、SSとSSの

▲競技の舞台は一般道

▲ラリージャパンの
リエゾン区間には
日本の古い街並みも

間の移動区間のことで、競技用車両が公道をその地域の道路交通法に従って一般車両と混走します。そのため、ラリージャパンでは、日本の古い街並みを通ったり、一般車両と競技用車両が一緒に信号待ちをするシーンも見ることができたりします。競技車両や選手を間近に見ることができ、モータースポーツを身近に感じられることもWRCの特徴です。

日本でのWRCは、2004～10年にかけて北海道で開催されていました。会場を北海道から中部地方に移し、20年に再び開催する計画でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、2年連続で中止となりました。12年ぶりの開催となった昨年は、愛知県・岐阜県の両県で行われ、観客動員数は4日間の合計で8万9千人以上に達しました（ラリージャパン事務局発表）。

競技コースは愛知県の豊田市・岡崎市・新城市・設楽町、岐阜県の恵那市・中津川市にまたがり、ラリーの迫力や日本の四季を感じられる山間地域を設定しています。開催地の一つである豊田市に本社を構えるトヨタ自動車は、「GRヤリス ラリー1ハイブリッド」で参戦します。

今年のラリージャパンでは、全国の地方自治体で初めて、愛知県豊田市が運営に携わります。SSの一部を豊田市が所有する豊田スタジアム（愛知県豊田市）で行います。普段はサッカーなどの試合が行われ、天然芝が敷き詰められていますが、ラリージャパンの大会期間中はアスファルト舗装にします。

持続可能な大会を目指し、カーボンニュートラルへの対応として地産再生可能エネルギーの活用や電動車からの電力供給などを行います。出展者のチラシなどをペーパーレス化するなど、ごみの最小化にも取り組みます。

昨年のラリージャパンでは、競技車両から出火したり、閉鎖された競技区間に一般車両が進入したりするなどのアクシデントに見舞われました。この経験を踏まえ、大会運営に携わるスタッフを1千人以上に増やし、入念な安全対策を実施します。「競技者、観戦者すべての人にとって安全・安心な大会」（ラリージャパン2023実行委員会）を目指して取り組みます。

モータースポーツファンや地域住民が一体となって競技が行われるのがWRCの醍醐味です。11月のラリージャパン開催に向け、機運が高まっています。

▼豊田スタジアム内にもコースを設置

4年ぶり海外チームも参加
学生フォーミュラ日本大会2023

学生たちが自作したフォーミュラカーの性能や設計思想などを競う「学生フォーミュラ日本大会2023」（自動車技術会主催）が8月28日（月）～9月2日（土）の6日間にわたり、静岡県小笠山総合運動公園（エコパ、静岡県袋井市）で開催されました。21回目となる今回は65チームが競技に進み、電気自動車（EV）での参加チームは21チームと全体の3分の1となりました。4年ぶりに海外チームを迎えたこともあり、会場では学生らの交流が盛んに行われました。

21回目となった学生フォーミュラ日本大会

学生フォーミュラは、次代の自動車産業を担う若手エンジニアの育成を目的として開催されているもので、学生たちが自ら構想・設計・製作した車両を実走させ、タイムや走行性能などを競う動的審査に加え、設計思想やコストなどの静的審査の両方で競い合います。2003年に第1回が富士スピードウェイ（静岡県小山町）で行われ、06年の第4回以降、エコパで開催しています。

参加車両はタイヤを覆う部品や運転席の屋根がない「フォーミュラスタイル」と呼ばれる四輪車とすることなどが要件として定められています。学生たちは実際の車づくりと同じように、部品の調達やコスト管理などを行います。ものづくりの基本と、1台の車を作り上げるまでに必要な工程を学ぶことができ、自動車産業で働くことの楽しさや醍醐味を感じられる機会にもなっています。第1回の開催から20年以上が経ち、のべ27,000人以上のOB・OGが自動車産業をはじめとしたものづくり産業の第一線で活躍しています。

海外の大学も参加した

炎天下での競技、チーム全員が力を出し切った

レース後、喜びを爆発させる学生

優勝した京都工芸繊維大学チーム

2位日本自動車大学校チーム

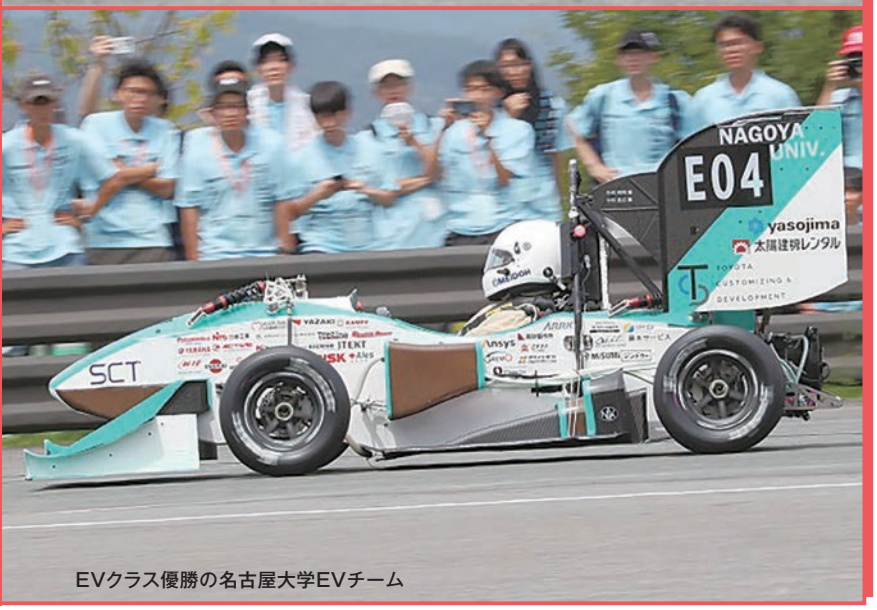
今年は77チームがエントリーし、会場であるエコパでの競技には事前審査を通った65チームが参加しました。このうち3分の1に当たる21チームがEVクラスでのエントリーでした。ガソリンエンジン車クラスへのエントリーが中心ではあるものの、EVクラスの参加チームは年々増えており、電動化の潮流がここにも表れてきているようです。

新型コロナウイルス感染拡大以降、昨年までは参加を国内チームに絞っていましたが、今年からは海外チームも大会に復帰。タイやバングラデシュ、中国、台湾、インドネシアからエントリーがあり、エコパでの競技には4チームが参加しました。

競技は「車検」「静的審査」「動的審査」の3項目で審査します。静的審査は、車両設計の適切性を評価する「デザイン（設計）」種目、市場要求に合ったビジネスモデルプランを提案できるかを評価する「プレゼンテーション」種目、生産活動におけるコストの妥当性を評価する「コストと製造」種目の3つです。動的審査は、コーナリング性能を競う「スキッドパッド」種目、直線やターンなどがある周回コースを約20km走行する「エンデュランス」種目など5種目を競います。速さだけでなく、ものづくりの総合力を審査する内容となっていることが特徴です。

期間中は6日間とも晴天に恵まれ、気温30度以上の真夏日が続いたこともあり、最終日の審査では日焼けし

3位岐阜大学チーム



EVクラス優勝の名古屋大学EVチーム

2023年がエコパで最後の開催に

17年間の感謝を伝えたい！

▲学生フォーミュラを支えてきたエコパへの感謝の寄せ書き

来年からは会場を愛知県常滑市の「アイチスカイエキスポ」（愛知県国際展示場）に移して開催します。17年間、エコパで培われてきた学生フォーミュラは、次代を育成すべく新会場に受け継がれていきます。

た学生たちの姿も多くありました。各チームが全員で力を出し切って競技に臨む姿に、観戦に訪れた人たちも暑さを忘れて声援を送りました。中でも、75mの区間をどれだけ速く走れるのかを競う「アクセラレーション」競技では、EVクラスに出場した名古屋大学EVチームが3.649秒という圧倒的な速さを見せ、周囲を驚かせていました。

バングラデシュのクルナ工科大学チームの競技車両は、競技前夜に日本に到着しました。無事に日本に届いた際は、周囲から歓声と拍手が起きたそうです。しかしながら、到着後に競技に必要なドライビングスーツを忘れてしまったことが発覚。日本のチームがスーツを貸してくれたことで、無事出場することができました。ライバル同士でありながら、同じ競技に出場する同志としての絆が生まれました。

優勝は昨年に続き、京都工芸繊維大学チームでした。通算5度目の優勝で、歴代最多の上智大学チームと並びました。準優勝は日本自動車大学校チーム、3位は岐阜大学チームでした。EVクラスの優勝はアクセラレーション競技で唯一、3秒台を記録した名古屋大学EVチームでした。

大会最終日に会場を訪れた自技会の大津啓司会長は、「学生フォーミュラはものづくりの基礎に加え、リーダーシップやチームワークを学ぶ機会にもなります。それが社会に出た後も生きてくると思います」と参加した学生たちにエールを送りました。

バイク文化の創造へ！

「第11回 BIKE LOVE FORUM in 静岡・浜松」を開催

自工会など二輪車関連の業界団体や経済産業省、自治体で構成するBIKE LOVE FORUM（以下、BLF）開催実行委員会は９月８日（金）、静岡県浜松市のえんてつホールで、「第11回BIKE LOVE FORUM in 静岡・浜松」を開催しました。ここ数年、市場が活性化している二輪業界ですが、この流れを持続させるためには、若手のライダーが二輪車を楽しめる環境の整備や安全面での支援が欠かせません。参画団体や地元自治体が一堂に会し、二輪業界の未来を語り合いました。

BLFとは、世界に通用する素晴らしいバイク文化の創造を目指すとともにバイク産業の振興、市場の発展等を図ることを目的とし、バイクに関わる企業･団体･地方公共団体等が核となり、利用者等も交え、関係者間で社会におけるバイクへの認知と受容、共存のあり方や、バイクの将来像等に関して真摯に議論し活動する取り組みです。今回は「バイクカルチャー発祥の地、静岡で若年層の交通安全教育を考える。」をテーマに、二輪産業の振興策についての取組状況の発表、国内二輪市場好調についての考察や議論を行いました。会場には二輪業界関係者のほか、報道関係者、一般参加者などが数多く訪れました。

開会にあたり、西村康稔経済産業大臣のビデオメッセージが披露されました。西村大臣は、「これからも日本の二輪産業が世界に冠たる産業であり続けてほしい。そのために全力を尽くしていく」と業界の発展に向けたエールを送りました。続いて、経済産業省製造産業局自動車課長の清水淳太郎氏が、「バイクへの愛、楽しいという想いを感じ、その想いを周りの10人、そしてさらにその周りの10人へと輪を広げていくことが産業活性化のカギ。自動車課としての立場はもちろん、一人のバイクを愛する者として産業全体を公私ともども盛り上げていきたい」と挨拶しました。また、静岡県副知事の森貴志氏が、静岡県で開催するツーリングキャンペーンを紹介し、「徳川ゆかりの地や食など静岡の文化を楽しんでもらいたい」と静岡県の魅力をアピールしました。

プログラムではまず、自治体の取り組みが紹介されました。静岡県工業技術研究所浜松工業技術支援センター長の鈴木敬明氏が、「バイクづくりを支える静岡県 ―県の支援と元気な地域企業―」と題し、部品の製造で高い技術を持つ県内企業を紹介しました。また、磐田市経済産業部産業政策課副主任の飯尾謙也氏と浜松市産業部産業振興課副主幹の鈴木一視氏は、独自のツーリングイベント（磐田市）やヘルメットなどの収納設備付き駐輪場

▼二輪業界関係者、報道関係者、一般参加者が参加

▲西村康稔経済産業大臣のビデオメッセージ

▲清水淳太郎経済産業省製造産業局自動車課長

の実証実験（浜松市）などの取り組みをそれぞれ発表しました。

BLFが2021年に策定した「二輪車産業政策ロードマップ2030」では、市場の活性化を取り組みの一つに掲げています。これについてBLF開催実行委員会委員長である経済産業省製造産業局自動車課課長補佐の是安俊宏氏が、「SNSや人気コンテンツとのコラボレーション、ファッション、バイクスクールなどの取り組みが若者や女性のバイク人気につながっている」と分析しました。一方、BLF開催実行委員会幹事長(自工会二輪車委員会)の川瀬信昭は、「昨今の若年層はマナーが良いだけに、停める場所がないことで二輪車に乗ることを諦めてしまう」と課題を提起。二輪車の死亡事故件数や原因についても説明しました。また日本二輪車普及安全協会専務理事の小椋道生氏が、同会で取り組む安全啓発の取り組みを紹介しました。

「これから求められる若年層の交通安全教育」をテーマにしたパネルディスカッションも開催しました。文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課安全教育推進室室長補佐の林剛史氏は、学校での交通安全教育の取り組みについて紹介する一方、「個人的な経験では、グッドマナーの実践者こそが最良の『生きた教材』。それぞれのライダーが教材としてマナーの良い安全運転に取り組んでもらいたい」と述べました。また、埼玉県警察本部交通部交通総務課課長補佐の村上崇氏は、「免許を取らない」「バイクを買わない」「バイクに乗らない」の「三ない運動」を廃止した埼玉県の高校生向け交通安全講習を紹介しました。自工会二輪車安全教育分科会分科会長の飯田剛は、「二輪車を禁止すると隠れて乗ることになり、交通安全運転教育を届けられない」と述べ、自工会として三ない運動の見直しを他府県に広げていく考えを示しました。

フォーラムを振り返り、自工会副会長兼二輪車委員会委員長 日髙祥博（ヤマハ発動機社長）は、「今の良いモメンタムをどう維持していくのか、メディアの方々にも良い発信をお願いしたい。今日のパネルディスカッションで10代の事故が大変多いということを知った。悲しい事故を防ぐため、遠ざけるのではなく、きちんと教育していくことが重要だと感じた。事故をなくし、世界に誇れるバイク文化をつくっていきたい」と総評を述べました。来年のBLFは宮崎市で開催する予定です。

第11回
BIKE LOVE FORUM
in静岡・浜松（9/8）

静岡をバイクで巡るツーリングキャンペーン出発式

▼パネルディスカッション

▼自工会副会長兼二輪車委員会委員長 日髙祥博

自工会 二輪車委員会と日本二輪車普及安全協会

「バイクの日」のイベントを開催

▲大勢の来場者で賑わう会場

▲自工会副会長兼二輪車委員会委員長
日髙祥博

自工会 二輪車委員会（以下、自工会）と日本二輪車普及安全協会（以下、日本二普協）は8月19日の「バイクの日」にちなみ、二輪車普及・安全啓発のためのイベント「8月19日はバイクの日　HAVE A BIKE DAY」を東京・秋葉原の「秋葉原UDX2F アキバ・スクエア」で開催しました。イベントにはカワサキモータース、スズキ、本田技研工業、ヤマハ発動機の国内二輪メーカー4社が揃って参加し、最新モデルの展示で会場を盛り上げました。

バイクの日は、1989年に政府総務庁（現内閣府）の交通安全対策本部が交通事故撲滅を目的に制定したものです。各地の自治体の交通安全対策室や警察が、バイクの日を中心に安全運転に関する教室などを開いています。2000年7月からは、毎年7～9月の3カ月間を「バイク月間」と位置付け、全国でイベントを行うようになりました。自工会と日本二普協も、この日に合わせて啓発イベントを開催し、交通安全の啓発活動を推進しています。

15回目となった今年のイベントには、猛暑にも関わらず、バイクファンや家族連れなど約2千人が訪れました。開会式で自工会副会長兼二輪車委員会委員長 日髙祥博（ヤマハ発動機社長）は、「ライダーをはじめ、秋葉原にお越しの皆さま、並びにLIVE配信でご覧の皆さまにも、ぜひとも安全運転を再確認する日にしていただきたいと思います」と挨拶しました。10月に開催される「JAPAN MOBILITY SHOW 2023」にも触れ、「バイクの魅力を感じていただけるイベントですので、ぜひご期待ください」などと述べました。

会場で注目をあびていたのは電動

バイクです。ホンダは「EM1e:」（イーエムワンイー）、ヤマハは「E01」（イーゼロワン）、スズキは「e-BURGMAN」（イーバーグマン）、カワサキは「Ninja EV」（ニンジャイーブイ）プロトタイプをそれぞれ展示し、来場者の関心を引きました。脱炭素社会の実現へ、二輪車の電動化に対してもユーザーの関心が高まっているようです。

また、人気が高まっているキャンプとバイクの組み合わせをテーマにした展示コーナーも設けました。各社のモデルとキャンプ用品を展示し、バイクの楽しみ方の一つとして提案しました。このほか、映画「シン・仮面ライダー」の劇中で登場した「サイクロン号」や白バイの展示などもあり、人気を集めました。

ステージ上では、警視庁の女性白バイ隊「クイーンスターズ」による交通安全啓発、ユーチューバーやタレントによるトークショー、安全訴求動画といったプログラムが行われました。バイクと趣味をテーマにしたステージや、俳句コンテスト「バイクで俳句」やフォトコンテスト「バイクの日フォトコンテスト」の入賞作品の発表も行われ、バイクに楽しく触れ合う一日となりました。

自工会と日本二普協は、二輪車ユーザーの安全に関わる各種の啓発活動に取り組んでいます。23年３月には二輪車の重大事故防止に関わる啓発動画を制作しました。ジャパンライダーズアンバサダーの梅本まどかさんとモータージャーナリストの宮城光さんが出演し、事故が発生する仕組みや事故防止の心構えなどのポイントを伝えています。二輪車ユーザーだけでなく、四輪車ユーザーにも役に立つ内容となっています。

警察庁によると、22年の二輪車の交通死亡事故の損傷部位のうち最も多いのは頭部で45％を占めますが、次いで多いのが胸部（25％）です。会場ではヘルメットだけでなく、胸部プロテクターの装着も呼び掛けました。

【8月19日はバイクの日】都内でリアルイベント開催！

自工会、学生向けオンラインイベント

「Drive for the Future ―モビリティ業界 Special Talk―」を開催

自工会はモビリティ業界の魅力を大学生・大学院生に知ってもらうオンラインイベント「モビリティ業界 Special Talk ～先輩の半生に触れ、新たな選択肢のヒントに出会う～」を7月8日に開催しました。自動車メーカーで働く社員の体験談を聞くことで、モビリティ業界で働くことをイメージし、将来の選択肢を広げてもらうことが狙いです。自工会会員メーカー13社の社員が集まり、入社のきっかけやこれまでに関わった商品、育児とキャリアの両立などをテーマに語りました。

▲和やかな雰囲気の中で行われたイベント

▲職場の写真を見せながら仕事内容を説明

「若手社員を徹底解明。あの会社で何してる?」をテーマにした最初のセッションには、いすゞ自動車の永田詩織さん(2年目)、SUBARUの渡邉恵理さん(3年目)、ダイハツ工業の神谷美沙紀さん(5年目)、日野自動車の立花真知子さん(5年目)、マツダの佐々木理沙子さん(4年目)が登場しました。普段の職場風景の写真とともに、仕事内容や職場の雰囲気などを紹介し、モビリティ業界に興味を持ったいきさつなども語りました。

ダイハツの神谷さんは、大学時代のゼミでの海外視察が入社のきっかけだったそうです。タイの企業視察で自動車メーカーの工場も見学し、「工場内のスローガンが日本語で、日本のものづくりが海外にも広がっていることに感動して関心を持ちました」と話しました。

日野の立花さんは「大学時代の勉強を生かせているか」という質問に対し、「大学時代は無機材料の研究をしていましたが、今の仕事は全く違う分野です。車も詳しくありませんが、会社がきちんとフォローアップする態勢ができています」とサポートが充実している様子を紹介しました。学生時代に制御工学を学んだというマツダの佐々木さんは、「学生時代の知識を使えると思っていましたが、太刀打ちできません(笑)。今は学会や大学の教授の研究などを見たり聞いたりして最新の技術を学んでいます」と話しました。

2番目のセッション「先輩の記録。あの〇〇私が担当しました」では、カワサキモータースの森衣緒理さん(7年目)、スズキの林佳奈さん(8年目)、トヨタ自動車の長尾芽衣さん(14年目)、ヤマハ発動機の大島かほりさん(9年目)が、自身が担当した商品の紹介や、開発裏話を披露しました。

カワサキで商品企画を担当する森さんは「意見をまとめることが難しい。私は各担当者に頼む立場。現場の方が一番苦労してくださっています」と商品を市場に出すまでの苦労を話しました。

自動車メーカーで働く醍醐味の一つは、担当した車が世に出て、実際に走っているところを見られることです。スピードメーターなどを設計するスズキの林さんは「全国いろいろなところに行ったとき、関わった車を見るとうれしい」と、新興国戦略車「IMV」を担当したトヨタの長尾さんは「海外でユーザーを見かけて話を聞きました。『この車、大好きなんだ

▲自身が携わった製品などを紹介

よ』と言ってもらえて感動しました」と、仕事のやりがいを感じた瞬間をそれぞれ語りました。

最後のセッション「先輩たちが明かす。ワークライフバランス秘話」では、日産自動車の松山鮎華さん（17年目）、本田技研工業の野坂泉さん（17年目）、三菱自動車工業の黒畑あゆみさん（16年目）、UDトラックスの池田笑さん（15年目）が登場しました。全員が2児の母です。これまでのキャリアの振り返り、「育児との両立が難しく、もどかしい思いをした」（日産・松山さん）、「仕事も子育ても頑張りたいという思いがあった」（UD・池田さん）と、抱えていた悩みを打ち明けました。

育児とキャリアを両立できるよう、自動車メーカーでは年々、福利厚生を充実させています。松山さんは、政府主導の企業向け支援「こども家庭庁ベビーシッター券」、野坂さんは学童や保育園などの延長料金などを会社が9割負担してくれる「育児費用補助制度」、黒畑さんは配偶者の異動に合わせ休業できる「帯同休業」といった制度を利用したそうです。

育休や時短勤務に対する会社の雰囲気について、野坂さんは「制度は最大限に使っていこうという環境がある。私自身、育児経験者として社内のパパ・ママに制度を紹介して広めています」と話しました。池田さんは「業界で子育て世代が交流する機会があればうれしい」と提案しました。

自動車業界が環境変化や社会的責任といった課題を乗り越え、未来をつくっていくためには多様な人財が必要です。自工会は今後もこうしたイベントを通して、モビリティ業界の魅力を発信し、共に働く仲間を増やしていきたいと考えています。

▼仕事とキャリアの両立などを語る先輩社員

遊びながらクルマを学べる!

科学技術館の「ワクエコ・モーターランド」

▲子どもたちに人気の運転シミュレーター

子どもたちに自動車を身近に感じてもらえる施設が東京の中心にあります。科学技術館（東京都千代田区）２階の「ワクエコ・モーターランド」です。シミュレーターによる運転の模擬体験や、自動車が動く仕組みやものづくりの流れ、安全・環境への取り組みといったテーマを装置や映像などを使って分かりやすく紹介するなど、趣向を凝らした展示を行っています。休日のお出かけスポットとして最適です。

▲リサイクルの流れを紹介するパネル

▲手で動かせるスケルトンモデル

科学技術館は「産業を身近なものに」というテーマで1964年4月、皇居に隣接する北の丸公園内に開館しました。5階建ての館内には自動車、鉄、建設、電機・電子・情報・通信、電力、薬といったさまざまな産業を紹介する展示室が設けられています。どの展示場も「見て、触って、動かす」ことによって産業を知ってもらえるつくりになっています。平日には小学校中・高学年の子どもたちが社会科見学で訪れるほか、休日には家族連れが多く来場します。

ワクエコ・モーターランドは自工会が提供している展示室で、「どりーむ」「ものづくり」「うんてん」「かんきょう」「しくみ」「あんぜん」といったテーマ別に、映像やパネル、運転シミュレーター、カットモデルなどを使って自動車を紹介しています。科学技術館学芸員の松浦匡氏は、「身近なところを切り口にして、自動車の技術を紹介するつくりになっている」と話します。

子どもたちに特に人気なのが運転シミュレーターです。二輪車、乗用車、大型トラックのシミュレーターがあり、前方に映し出される映像を見ながら運転を体験できます。ワインディングロードの走行や街中でのエコドライブのほか、コネクテッドカーを体験できるものを展示室入り口横に設置しています。

「あんぜん」コーナーには自動車が衝突するときの音や衝撃、シートベルトが締まる感覚を体験できるシミュレーターがあります。合わせて、衝突を回避するための車線維持装置や衝突被害軽減ブレーキといった最新の安全技術を紹介しています。

産業という視点で展示を行っているのが同館の特徴です。自動車でも「ものづくり」コーナーがあり、映像で車づくりを紹介するとともに、クルマの形状を検討する際につくられるクレイモデルを展示しています。デザイン、設計、部品製造、組立といった車づくりの一連の流れを知ることができます。役割を終えた車のリサイクルの流れを紹介するパネルもあり、自動車産業全体を知ることができます。「将来、仕事を選ぶときの選択肢になる可能性も踏まえた展示内容」（松浦氏）になっています。

▼ワークショップでクルマの走る仕組みを学べる

▼シミュレーターでエコドライブを体験

▲「コレクションウォール」には名車のミニカーがずらり

自動車がどのように動くのかを紹介した「しくみ」のコーナーでは、手で動かせるスケルトンモデルを展示し、エンジン、トランスミッション、ステアリングなどの装置がどのように動くのかを見ることができます。ハイブリッド車のスケルトンカーは、運転席に座ってペダルを踏むとエネルギーの流れが目で見て分かるようになっています。ワークショップスペースも設けられており、自動車が動く仕組みを実験や映像で知ることができます。

展示場の奥のスペースには、実物大のクルマやバイクが映し出される「リアルスケールビジョン」があり、名車の数々を映像で紹介します。「コレクションウォール」には1950年代からの名車の数々がミニカーで並び、大人も一緒に楽しめる展示となっています。

科学技術館には、産業別の展示場のほかに、科学をテーマにした「遊び」「創造」「発見」の森を意味する「FOREST」（フォレスト）（5階）という展示場があります。

大きなシャボン玉をつくったり、竜巻を発生させたりする装置や、大きな装置でボールを運んだり、ロープを引くと滑車で車が持ち上がったりする装置など、子どもたちが夢中になるものが数多く並べられています。特徴は説明書きが一切ないことです。松浦氏は「何だ、これは?というアイテムをたくさん並べてあるので、見て、触って、動かしてみることで、科学について考えるきっかけにしてもらいたい」と話します。

子どもたちにはいろいろな体験をさせてあげたいものです。遊びながら学べる科学技術館に家族そろって足を運んでみてはいかがでしょうか。

▼触って動かして科学に触れる「FOREST」（左:大きな装置でボールを運ぶ。右:ロープを引くと滑車で車が持ち上がる）

jama
Japan Automobile Manufacturers Association

Japan Mobility Show

2023 10.26 Tue - 11.6 Mon

チケット情報

インターネット購入のみ
会場での当日販売はございません

jamagazine
Japan Automobile Manufacturers Association
vol.57 2023
日本自動車工業会「JAMAGAZINE秋号」2023年10月26日発行（季刊発行）
発行人：一般社団法人 日本自動車工業会 総合政策領域
発行所：一般社団法人 日本自動車工業会 〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目1番30号 日本自動車会館
総合政策領域 自工会インターネットホームページ「Info DRIVE」URL https://www.jama.or.jp/